

第42回学習会を、平成24年11月16日(金)19:00~20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

### 第42回の内容

講師 重枝一郎先生

- モラルジレンマ授業について
- モラルジレンマ授業の実際「まほうつかいのプレゼント」(演習)



引用文献・参考文献：モラルジレンマ資料と授業展開(中学校編) 荒木紀幸編著 明治図書(2005)

## モラルジレンマ授業

### 1 モラルジレンマ授業とは



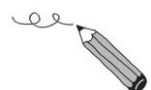
道徳的な価値葛藤(モラルジレンマ)の解釈を通して道徳性を発達させる授業

【選択肢を支持する理由付けが同じ重さをもって拮抗するからジレンマ】

### 2 モラルジレンマ授業について

- 自分の価値観が正しいものなのか、いつでもどこでも通用するものなのか検討し直す場(道徳授業)
- 児童生徒がもっている価値観にゆさぶりをかけ、これまでの自分の価値観を再検討
- さまざまな意見が出ること自体、まず必要(オープンエンド)
- 思考の論理構造をより高くしていく
- 参加者は、異なる立場の意見や発達的にみてより高い段階の論理に接することができる
- いろいろな人の立場に自分自身を置くことになる
- 意見の出にくいクラスに効果的、クラスの実態把握になる

※「こんな考えもあるんだなあ〜」と認め合えるようになれば、それでいい



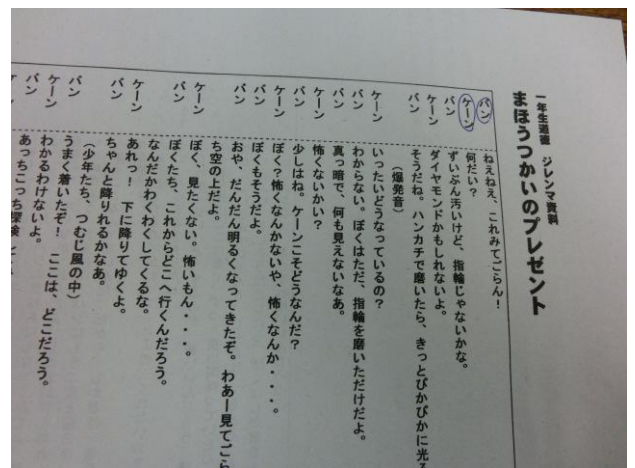
### 3 モラルジレンマ授業での教師の役目

- 安易に一つの結論に落ち着きそうになったとき、それまでの討論の不備を指摘するなどして、さらに討論を喚起する
- 導入で価値への方向付けをしたり、結論をまとめたり、価値の定着をはかったりする必要はない
- 資料を正確に読み取った後は、ひたすら児童生徒同士が積極的に意見を出し、活発に議論することをめざせばいい

### 4 モラルジレンマ授業の展開例

- ① モラルジレンマを提示（話の中の環境、用語、人物をはっきりさせる補助質問をする）
- ② 自分の仮の解決策とその理由を考えさせる（個人、同じグループ）
- ③ 討議（クラス全体）
- ④ 自分と違う立場の人があげる理由を要約させた上で、各自の最後の解決策とその理由をまとめさせる

- 
- ・ モラルジレンマ授業 教師の I メッセージ 開発的生徒指導
  - ・ チームワーク「相手を論破して言うことをきかせるより、論点を共有して橋をかけてきた」
  - ・ OJT 「現場知」「個別知」「組織知」のすり合わせでチームメイトをつくる
  - ・ 人間力 いろいろな人と信頼関係を結ぶ力。「この人と話したい」「この人の話を聴きたい」という関係性の中で、まわりを感化し、行動を起こさせる（主体性の総和=チーム力）
  - ・ 学級だより テンシュカク（テンション・修正・確認）
  - ・ SST とつなげる



### 道徳の授業に対する児童生徒の期待度

「道徳」の授業に対して、児童生徒のモチベーションが低くなる原因として、「ワンパターンの授業」「押しつけがましい授業」になっている場合があります。「今日の道徳では何をやるんだろう・・・楽しみだな」と、児童生徒が期待するようになるには、教師の創意工夫が欠かせません。

「モラルジレンマ授業」とは、道徳的な価値葛藤（モラルジレンマ）について集団討議をし、その過程で道徳的判断力を育て、道徳性を発達させることをめざしています。一般に道徳教材として用いられる「副読本」は、特別な1つの徳目（価値）を取り上げています。資料を一読すると、何を言いたいのか分かってしまうような道徳授業では、思春期に入る中学生になると、拒否反応を示すこともあります。それは、学ぶべき徳目（価値）を教え込まれ、押しつけられていると感じるからです。「価値の教え込みや押しつけ」ではなく、子どもの発達段階に配慮した魅力のある授業を開発することが、児童生徒の道徳授業への期待に応えることだと思えます。

そのひとつとして、児童生徒の自主性を尊重し、活発なディスカッションを通して道徳性を発達させる「モラルジレンマ授業」を紹介します。

「モラルジレンマ授業」は、児童生徒の内面に価値葛藤を生みだし、思考を活性化させます。まわりの意見を聴きながら、自分の考えを広げ、深めていきます。その過程での気づきが多ければ多いほど、満足度も高くなります。

### モラルジレンマ授業の進め方

「モラルジレンマ授業」では、道徳性の発達をめざしています。そのために授業では、自分とは違う価値観に触れさせ、価値観をゆさぶり、再検討させます。

このような授業を展開するには、次のような前提が必要です。

- 子ども側は、「民主的な話し合いができる」「ジレンマの内容を理解している」
- 教師側は、「話し合いをコントロールできる」「道徳的な論点を理解している」

そして、おおまかには、次のような指導過程になります。

- ①モラルジレンマ資料を通して、道徳的な認知葛藤を経験する。  
(子どもがジレンマを解決すべき問題と感じて、自分なりの考えをもつ。そのように考えた理由が何より大切)
- ②ジレンマに対して、自分の考えを表出する。
- ③話し合いを通して、自分の考えを他者の考えとすりあわせて吟味し、練り上げる。
- ④最終の判断とその理由をまとめる。(質が高まる)

教師は、次のことに留意します。

- ・様々な視点に立って考えさせる。(自分の心、他者、集団や社会、自然や崇高)
- ・道徳性の発達からみて、段階上位の考え方に触れさせる。(道徳的な認知葛藤をもたらす)
- ・行動が引き起こす結果が、他者に及ぼす影響を推測させる。
- ・結論をまとめたり、価値の定着をはかったりする必要はない。
- ・活発な議論を促すだけでよい。

### 「1主題2時間構成」の授業のよさ

もし、時間的な制約がないのであれば、2時間授業をおすすめします。それは、次のような理由です。

- ・モラルジレンマの共通理解に十分な時間を確保できる。
- ・扱っているモラルジレンマに対して、それぞれの児童生徒がどんな意見や考えをもったのかを事前に把握し、プリントにまとめることができる。教師は授業の予測をし、プランを練ることができる。心に余裕も生まれる。
- ・論点を明確にできる。

## 「モラルジレンマ授業」の実際

「瀕死の重傷を負った家族（妹）の命を救うために、たまたま家の前に車を止めていた運転手に暴行を働いて、車を奪い取って病院に向かった兄の行為に賛成か、反対か（コールバーグ作）」というモラルジレンマを例にして、考えてみましょう。

第1次：資料を読み、主人公の行為に賛成か反対かについて考え、判断・理由付けを行う。

第2次：第1次の判断・理由付けを基にして討論を行い、再度判断・理由付けを行う。

「道徳性を発達させる」というねらいを達成するために、教師は次のような役割をする。

- ①ジレンマの共通理解：資料の読み取りを正確に行い、ジレンマを引き起こしている二つの価値について、どちらの判断も正当な道徳的価値に基づいていることをおさえる。
- ②自己の考えの明確化：ジレンマに対する自己の考えを表明し、明確にさせる。ここでは、モラルジレンマに対して、その子なりの考えをもたせることが、教師の役割となる。自問自答を繰り返す中で、自己の考えを整理させる。十分に時間を確保する。
- ③討論：まず、児童生徒が互いに自分の意見を述べ合う。そして、対立点を論点として、討論を深めていく。意見が偏る場合は、教師がゆさぶりをかけるために「その価値観が本当に正しいのか」問いかけ、投げかけていく。いろいろな価値観に触れさせることが何より大切。その空気に触れさせる。「こんな考えもあるんだな」と認め合えれば、子どもの考えが深まり、広がっていく。最初は、個人的な自分のことだけを話していたのが、関係性の中での価値や社会のルールを踏まえた意見に変化していく。結論は出さず、オープンエンドで終わらせてよい。
- ④最終の道徳判断：最初の意見と変わっていてよい。考えが広がり深まることが目的。その質の高まりを、子どもが実感できるようにする。

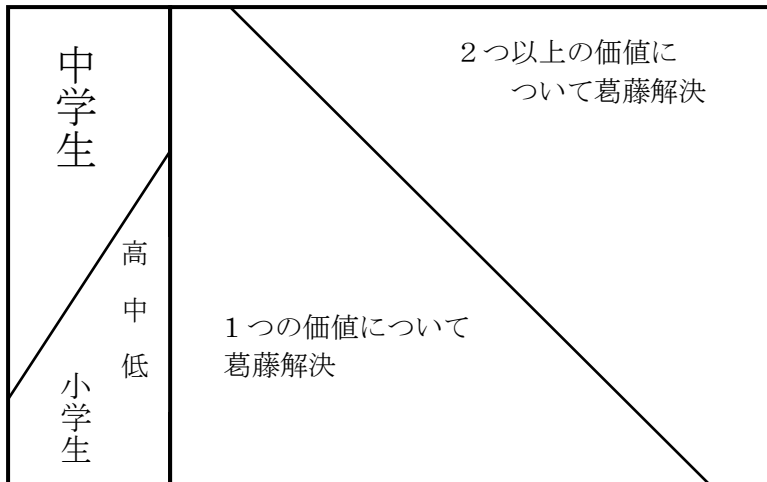
資料例の場合は、下記のような質の高まり（関係性の中での価値や社会のルールを踏まえる）が予想される。

兄の行為に賛成	兄の行為に反対
<ul style="list-style-type: none"> <li>・命は大切</li> <li>・断った運転手が悪い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・警察に捕まる</li> <li>・法律は守るべき</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の命は仕事より大切</li> <li>・暴行を働いて車を盗む罪悪感より、妹が死ぬ悲しみの方が大きい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・警察に捕まると、妹が悲しむ</li> <li>・もし病院に行っても、妹は助からないかもしれない</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことより、妹の命を優先するのは当然</li> <li>・罪を犯した兄の気持ちを妹はわかってくれる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・兄が罪を犯したことを知ったら、妹は喜ばない</li> <li>・運転手も本当に大切な用があったのかもしれない</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生命尊重は、法律上で最も重要</li> <li>・社会の基準によれば、罪を犯すことは悪いことだが、命を救うためなら道徳的正義となりうる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じような状況でみんながそうしたら社会の秩序は保てない</li> <li>・運転手には、自分の車を自由に使う権利がある</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生命に対する権利は、車の所有権を越えるもの</li> <li>・人の命を救おうと考えたときには、個人の道徳的原則に従って行動すべきである</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・命がかかっているとはいえ、他人の権利を侵すべきではない</li> <li>・法は人が守るための契約であり、個人の権利を守るための規範である</li> </ul>

※「生命尊重、家族愛」対「法律遵守、他者の所有権の尊重」



## 2つのタイプのモラルジレンマ資料



「モラルジレンマ授業」の資料は、一般的にオープンエンドの形で投げかけられる道徳的な価値葛藤の物語ですが、ジレンマの構造が比較的単純なものと複雑なものの2つのタイプに区別できます。

低学年では、発達段階を考慮すると、1つの価値について生じる葛藤を扱うのがよいと考えます。

例えば、「魔法使いの眼鏡」という、公平・公正という1つの道徳的な価値を扱った資料があります。

### 魔法使いの眼鏡（あらすじ）コールバーグ作

「拾った指輪をはめた途端、魔法の国へやってきたバンとケーンは、ほうびが貰えるというので、魔法使いがなくなった眼鏡を探すことになった。さんざん苦労して、ついに2人はプールの中に落ちているのを見つけた。最初に眼鏡を見つけたのはケーンであったが、バンがケーンの手をかりて、水の中から眼鏡をとりあげた。2人はどんなごほうびがもらえるのかと楽しみにして、魔法使いのところに眼鏡を届けた。ところが、魔法使いが用意していたのは、魔法の時計1つであった。この時計はどちらのものか。2人はそれぞれに正当性を主張して譲らない。さて、2人はどうすればよいか」

この場合、子どもたちは、バンまたはケーンの正当性を主張します。例えば、「バンが眼鏡をとったのだからバンがごほうびをもらった方がいい」「眼鏡に気付いたのはケーンだし、ケーンの助けがなかったら眼鏡はとれなかったからケーンがごほうびをもらった方がいい」等です。それが、視点を広げることで、「友だちだから、ずっと仲良しでいるために、時計は2人の共同の持ち物にした方がいい」「ルールを決めて交代で使った方がいい」「相手に譲った方がいい」等の考えや提案が出されるようになります。

このように、低学年でも、発言が変化していきます。これは、友だちの意見を聞きながら自問自答し、考えが広がり、深まっているからです。このように、低学年でも、子どもが自ら気づきを得て視点を広げることができます。

### 学級だよりで「発信」

「モラルジレンマ授業」を何度かすると、子どもたちが楽しみにするようになります。それは、自分の意見が言えるからです。また、話し合いのプロセスの中で、いろいろな意見に触れることができ、刺激を受けるからです。そして、友だちの意外な面を発見することができます。自分がもともと持っている価値を、見直す機会になります。答えが決まっているわけではなく、結論をまとめる必要がないので、自分の考えを堂々と話すことができます。それを認め合う場になります。自分と違う意見に気付かせることが大事なのです。

それを、学級だよりで「発信」すると、子どもたちの話し合いが意味付けられ、承認感を得ることができます。また、視点を整理することで、道徳的判断力を育成し、道徳性の発達を促すことにもなります。

例えば、視点1は「自分の心」、視点2は「他者」、視点3は「集団・社会」、視点4は「自然・崇高」として、授業で出た意見を整理し、学級だよりにのせます。授業後に学級だよりを読むことで、もう一度、授業を振り返り、自分の価値観を問い直すことができます。そこで、考えが変わる可能性もあります。「自問自答する」ことが、何よりも大切なのです。

## すべての児童生徒に「開発的生徒指導」

教育現場では、「話し合い活動」「言語活動」が重視されています。「子ども熟議」も奨励されています。また、大学における「白熱授業」も話題になりました。

道徳の授業での「モラルジレンマ授業」は、これらの要素を含んだ授業です。相手を論破するのではなく、論点を共有して、お互いの価値観を尊重しながら、自分の考えを伝え合います。このような授業を行うことは、「開発的生徒指導」といえます。

教師も「I メッセージ」で、自分の価値観を本音で語ると、それが、子どもの心に響くようになります。それは、子どもに対して、教師の人間性を見せることになります。子どもは、教師との人間的なつながりを求めています。「この人に話したい」「この人の話を聴きたい」このように子どもに感じさせる教師は、人間味あふれる魅力的な教師です。教師に人間味を感じ、信頼を寄せると、子どもは、その教師に触発され感化されます。その教師を尊敬し、自由に主体性をもって行動するようになります。

## 行事や日常生活、ソーシャルスキルトレーニングにつなげる

中学校では、3年間で子どもを育てるという意識があります。教科担任制なので、学年教師がチームを組み、3年間のビジョンをもって子どもを育てます。1年生は「しつけの年」、2年生は「思考の年」、3年生は「集大成」と考えて、特に2年生では、考えさせる場を仕組んでいきます。

例えば、修学旅行にカメラをもっていく必要があるか？写真屋さんが行くから必要ないのでは？「モラルジレンマ授業」のように、討論させます。

また、「明日、遊ぼう」と誘われたけれど、用事があって断らなければならない場合、どのように断ったらよいか・・・というジレンマに陥ったときの「上手な断り方」を学ぶというように、モラルジレンマとソーシャルスキルトレーニングをつなげることもできます。「自分の意見を相手に伝える」「理由も伝える」というトレーニングになります。

ソーシャルスキルトレーニングでは、4段階話法にあてはめてもいいでしょう。

- ①最初は、残念な気持ちを伝える
- ②理由を伝える
- ③断る
- ④代案

このような、スキルトレーニングをしておくことで、日常につながります。

道徳での「モラルジレンマ授業」を、日常生活や行事、さまざまな教育活動につなげることで、相乗効果があります。

『しなければならぬ』と閉じて考えずに、どんどん実践してつなげていくと、子どもにより変化があらわれます。まずは、どんどん実践してみましょ！

### ミニ・コラム

「ホウ・レン・ソウ」に替わる言葉は、「テン・シュ・カク」

ホウレンソウとは、仕事を進める上で基本となるコミュニケーション、「報告」・「連絡」・「相談」の頭文字をとった造語です。

この「ホウレンソウ」に替わる言葉として、「テンシュカク」をあげているのは、学びの共同体で有名な、佐藤 学教授です。

「テン」は「テンション」つまり、空気をつくる力です。例えば、新人教員が学校に来た場合、テンションが低い人より、「はい！何でもします！！」という人の方が、ポジティブな空気をつくれます。「シュ」は「修正する力」実践しながら建設的に修正し、それをアピールできる人。そして、「カク」は「確認」確認すると、ちょっとしたコミュニケーションが生まれます。

このように、「ホウレンソウ」より「テンシュカク」の方が、主体的で創造的な感じがします。道徳授業もビジネス・コミュニケーションも、キーワードは「自主性・主体性・創造性」です！

## 演習 「まほうつかいのプレゼント」

風土会参加の先生方で6人組をつくり、実際に「まほうつかいのプレゼント」というモラルジレンマ資料をつかった「演習」を行いました。

教師役を1人、決めてもらいます。そして、実際に「ミニ授業」をしてもらいました。

演習のポイントは、「実感」です。

自分とは違う意見に気付かせること、そして、他者のさまざまな意見を聞きながら、自分の考えを深めること、それだけです。

結論をまとめる必要はないし、収束しようとする必要もありません。

話し合いのプロセスで、いろいろな意見にふれる。そして、自分のもともともっている「価値観」を見直す。それだけで、意味のある時間になります。

ただし、ジレンマにならない場合・・・つまり、意見が偏る場合は、教師が刺激を入れる必要があります。

では、「まほうつかいのプレゼント」の場合、教師がどのような語りをすればいいでしょう？

それも、話し合ってもらいました。

授業前の教材研究は、絶対に必要です。

その教材研究を、6人グループで模擬授業を入れながら行うという時間になりました。

学校でも、短時間でよいので、数人の教師がグループで一緒に教材研究をするような日常の学び合いをお勧めします！必ず、新しい気付きがあります。



## 本日のキーワード

- 道徳的な価値葛藤（モラルジレンマ）
- 人間力＝関係性の中でまわりを感化し、行動を起こさせる「主体性の総和」（チーム力）
- テンシュカク＝「テンション」「修正」「確認」

### ♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ （参加人数 45名）

・「モラルジレンマ」について、はじめて学びました。小学校では、高学年で取り組みたいと思いました。本日は、中学校のことも知ることができ、小学校教師として、中学校のことも視野に入れて教育活動をしていかなくてはと痛感しました。

・自分自身もジレンマに陥るような課題で、悩みました。生徒の気持ちになれました。結論、正解を求めてしまいがちですが、最後は生徒各人が周りの意見を受け入れ、思いやればいいのかと、何だか安心しました。身の回りにもいろいろなネタがありそうな・・・すぐにでも実践できそうです。

・いろいろな意見を知るという点で、モラルジレンマ授業はおもしろいなと思いました。今の子どもたちは、特に話し方（コミュニケーションの取り方）を身に付けて育っていないので、学校の授業で仕組んで学習することが大切ですね。国語の教科指導でも活かせそうです。

（同じテーマで学んでいるのに、そこから視点が広がっているのが興味深いです。小学校の先生が中学校の視点で、教師が生徒の視点で、道徳から国語科の視点で・・・発想が広がります）

・生徒の心をゆさぶる発問をしていきたい。道徳でも自分の教科でも、まず、心をゆさぶって授業をしたい。

・はじめてのモラルジレンマでした。いつもの風土会以上に頭を使う内容で、生徒に実践するとどうなるのだろうか？とワクワクするような内容でした。決して「相手を論破させることが目的ではない」というのが大切だと感じました。同時に、教師の力量が問われるなと思いました。とても勉強になりました。

・道徳の授業はとても苦手です。だから、今回のテーマはとても参考になりました。自分でもできそうな気がします。生徒同士で理解を深めることができますと思います。

（生徒の心をゆさぶってください！！ワクワクしながら授業をしましょう！！もちろん、できます！！）

・私は高等学校の教員志望の学生ですが、SSTやアサーショントレーニングの大切さがよくわかりました。ジレンマについての討論では、「一つに導く必要はない」という言葉がとても印象的で、あまり、自分の価値観を押しつけないようにしたいと思いました。

・教師の「アイ・メッセージ」と「モラルジレンマ授業」の関係に興味をもちました。日頃、他人の価値観の多様性を認め合っている雰囲気があるその上で、“これは先生はきらいだ、許せない”というメッセージが発せられれば、生徒たちにとっては強烈なメッセージになると思いました。

・十人十色で、いろいろな考え方を学べる体験でした。以前、クロスロードというカードゲーム（危機管理を学ぶゲーム）をしたことがあります。いろいろな考え方を聞いて、仲間意識がもてると感じました。

（※「クロスロード」とは、阪神・淡路大地震をきっかけとして、大地震の被害軽減を目的に文部科学省が進める「大都市大地震軽減化特別プロジェクト」の一環として開発された災害対応カードゲームです。ゲームでは、『YES』か『NO』の2拓の問題事例（計10問）が出題されます。参加者は、『YES』か『NO』を選択し、「なぜそう思ったか」意見交換しながら、ゲームを進めます。災害時には、同時多発で発生する想定外の問題に対して、ジレンマに悩みながら最適解を探し出す岐路（＝クロスロード）に立たされます。ゲームを通して自分とは異なった意見や価値観があることに気付くと同時に、誠実に考え、対応していく判断力・行動力を培っていきます。例えば、『あなたは食料担当の職員。避難所に住民が大勢避難してきたが、食料は人数分容易できていない。あなたはその食料を配りますか？YES？NO？』）